

人生の道づれ

——熊本バンド再考——

森 岡 清 美

1. 人生の道づれ

1. コンボイ

本稿では人生の戦友のような、人の一生の長い道行きにかかわる友人関係に注目したい。その手がかりとして、興味深い一つの学説を紹介することから始めよう。

日本研究で著名なアメリカの文化人類学者プラス（Plath, D.W., 1930- ）が、1972年、阪神地域在住の中流階級に属する中年日本人を対象として、彼らの成長過程にかかわる人間関係的要因を明らかにするために、その人生経歴について詳細な面接調査を実施した。研究成果は *Long Engagements: Maturity in Modern Japan* と題して公刊され (Stanford University Press, 1980)、井上俊氏らの流麗な邦訳『日本人の生き方—現代における成熟のドラマ』（岩波書店、1985）によって、人間発達に関心のある日本人専門家を啓発した。

プラスは資料の分析にあたり、キータームとしてコンボイ *convoy* なる語を採用した。元来「護衛しあいながら移動する乗物集団」を意味するこの概念を、「人生航路を旅する道づれ」の意味で用いることにより、人間の成熟にとって必要な、親密な関与者たち *intimate consociates* の長期にわたる相互的な関わり *long mutual engagements* を、第一次集団 *primary group* とか重要な他者 *significant others* といったよく知られた概念よりは、時間的厚みをもって捉えうると考えたのである [1980: 222, 225]。

プラスによれば、「道づれ」とはある人の人生を後押しし警備する

一群の親密な関与者である。彼らは、その人にとって第一次的な社会資源であるとともに第一次的な社会的拘束でもあり、互いに支え合って成長する。具体的には家族、親類、同級生、職場の同僚、その他の友人である [1980 : 136, 138]。プラスが事例紹介でふれた例は、ほとんどが夫婦、姉妹、親子、嫁姑など家族であって、時に同級生など友人も現れるが、職場の同僚の影は薄い。主な「道づれ」の種類は調査対象の発達段階と性別によって規定されることだろう。プラスの調査対象は有配偶の中年男女であった。

人生の道づれである親密な関与者を、①きわめて親密、②ついで親密、③それ以外の三層に分けうるとして、幼少者にとり、①は親きょうだいなど同居の家族、②は近い親類、③は遊び友だちであろうし、就学中の青年にとって、①同居家族は変わらずとも、②に学校の同級生や運動部の同輩（1～2年の上下を含む）が現れ、寄宿舎や下宿生活の若者では、同室、同寮あるいは同宿の学友が①に食い込んでくるかもしれない。さらに既婚有職者になると、①を配偶者と子どもが占め、別居の親きょうだいは②に押し出されて学友に並び、③に職場の同僚が入りこんで近い親類と肩を並べることだろう。全体として、家族こそ最も関わりが深くかつ長期にわたる関与者であり、それに次ぐのは学校の同級生ではないだろうか。

2. 友人関係

プラスは面接対象者の一人が、息子は「若年の」友だちであり、夫は「最良の」友だちだと述べた類推事例を紹介する一方で、友人関係について、概してこれを育てるのに最も大切なのは思春期である、と説明している [1980 : 211, 169]。家族的「道づれ」関係は成長過程でおのずから成るのにたいして、友人的「道づれ」関係は一定の段階で選ばれるものという意味で、両者は性格を異にするが、前者は普遍的に存在し、後者ももともと広く存在していた。

民俗学的資料によれば、同じムラに住む年齢の同じか近い若者たちが、成年に達する頃、同志的に「連中」と呼ばれる仲間を作ったり、あるいは同じ年齢の者が成人してから「同年会」「同年講」などという仲間を作って、儀礼的および実用的な交際を終生変わらず持続する慣行が各地にあった [竹内 1960 : 1619]。また、その年頃に「兄弟分」の約束

をして眞の兄弟に準ずる交際をする慣例も、少なからず報告されている〔竹田 1989〕。男子の同年輩といえば友人であり、友人関係を作る慣行はムラを社会的基盤として広く行われていたのである。

こうした慣行によって作られた友人関係は、婚礼や葬送など儀礼的なイベントでの支援協力だけでなく、金銭の貸借とか労働の協同や交換といった実用的な機能を果たし、村落生活において重要な機能を担ったため、慣行として長く存続したのであろう。しかし、これら手段的機能のほかに、人間関係などで困った時の相談相手となる、親兄弟にも話せないことも兄弟分にはうち明けるという、情緒的機能があった〔竹田 1989：27-28〕。慣行で守られた手段的機能が、都市化・産業化・人口移動といった社会変動のなかで衰弱消滅するにしたがい、慣行としての友人関係が姿を消していったが、その跡に情緒的機能を軸とする友人関係が残り、「人生の道づれ」としての意義を保ったと言えるだろう。

田舎住まいの若者には、学齢に達して始まった町村単位の小学校の同級生付き合いは10歳代の中頃で終わるが、つづいてムラの若者組あるいは青年団の付き合いがあり、やがて兵役適齢で同年関係が意識化され、25歳以後の厄年祝いの展望が見えてくる。したがって、学校歴はムラの生活歴と合体して同年配付き合いを支える。他方、義務教育以上に進学した若者には、ムラの生活歴を超える部分が拡大して慣行の制約を脱し、主に学校歴が同輩意識また同輩行動を内容とする情緒的友人関係の形成に与ったことだろう。そのような友人関係の形成は、中等および高等教育制度の整備によるところが大きかったに違いない。

私がかつて近代日本の宗教の研究に携わり、若者の同志的結合が日本宗教の歴史を切り開く運動を展開した事例に遭遇したことがあるので、これに着目して、明治初期の慣行的ならざる「人生の道づれ」としての友人関係を焦点を定めたい。その時代、士庶の間では慣行としての友人関係が広く行われていたはずである。

中等―高等教育のもとで友人関係の慣行的形成を脱した若者について、その選択的形成に注目し、しかも、明治初期に観察対象を求めるといのであるから、歴史にその名を留めた事例、したがって例外的ともいべき少数の事例となることであろう。かくて私は、その一事例として、熊本洋学校出身者たちの熊本バンドを取りあげる。その考察はもっぱら文献資料に依らざるをえないが、既刊関係資料と先行研究が豊富に存在

することは幸いである。

バンド band とは元来「共に行動する一団の人々」を指す語であって、コンボイのように「移動」したがって時間の厚みを明示的に含著しない。『植村正久と其の時代』第一巻に横浜バンド、熊本バンド、札幌バンドの名称が登場して以来〔佐波 1937：461〕、バンドの語は日本近代キリスト教史の常套語となった。これらのうち札幌バンドと呼ぶのはミスノーマーとの意見〔高橋 2003：72〕もあるが、本稿ではそこに立ち入る余裕はない。

3. 研究の意義

「人生の道づれ」と題してこのような探査を行う意義は、少なくともつぎの二つである。まず第一は、現代都市中産層にプラースが適用した「人生の道づれ」概念を、日本の近代化が始まった時代のエリート候補者たちに適用して、この概念の彫琢を試みることである。

プラースは面接調査を行ったので、その時点での対象者の「道づれ」を総体として視野に収めえたものの、家族的道づれに焦点を合わせたのに対し、こちらは最初から友人的道づれを問題にすること、またプラースは時間の厚みを重視するといひながら、大幅に調査時点の情報に限られたのにたいし、こちらは「道づれ」形成の時間的展開に焦点を置くこと、さらに調査時点でプラースが視野に収めた「道づれ」の総体は、彼によればエゴを焦点としたエゴ依存的な独自の一团 panel あるいはまとまり coherence であるが〔1980：136-138〕、こちらはそのようなエゴの集合であること、つまり観察の第一次的対象が異なる。さらに、こちらは集合した道づれたちの複数の伝記を利用するとともに各種の記録資料を探ることによって、一つの出来事や人物をいくつかの異なる資料源から観察して、多面的複合的な理解を達成することに努める。こうした対象と方法の相違がこの概念の彫琢に資するかもしれない。

第二は、すでに多くの先行研究があるこれらのバンドに「人生の道づれ」という新しい視角から光を投じることにより、従来看過されていた側面を照らし出すことである。

2. 熊本バンド

ブラスは、谷崎潤一郎（1886-1965）の『細雪』[1955]に登場する
時岡家の四人姉妹を人生の道づれの視点から興味深く描き分け [Plath,
1980: 126-141]、とくにその章で印象深く「人生の道づれ」概念の有効
性を示した。谷崎は現代阪神地域の中一上層家族の家庭内に焦点を絞っ
て繊細な感情のやりとりを細やかに描き出したが、歴史の動きのなかで
家族的道づれを捉えた、したがってノンフィクション作品の好例として
は、徳富健次郎（1868-1927）『竹崎順子』[1923]を挙げることができる
だろう。舞台は幕末から明治初期の肥後国、主人公は杉堂村の郷土、
惣庄屋矢島家の9人きょうだい、その真中5番目の娘順子であるが、彼
女のきょうだい、またきょうだいたちが結ぶ親類ネットワーク総体の一
代記と言えなくもない。このネットワークが熊本バンドの若者たちに同
じ平面で連なるのである。

1. 熊本バンドとは

まず、熊本バンドの要約的な紹介から始めなければならない。熊本洋
学校で米人教師ジェーンズ (Janes, LL, 1837-1909) に感化され、1876
年1月、熊本郊外の花岡山で「奉教趣意書」なる誓文に署名した35人
の生徒、署名に参加しなかったが実質的に彼らの仲間と見なすべき者5
人をこれに加えた40人をもって、熊本バンドとみる説がある。これは
熊本洋学校に焦点を置いた把握である。これにたいして、彼らが大学入
学した同志社に当時在職の宣教師が、この特色ある集団を熊本バンドと
呼び慣わしたことに着目して、草創期の同志社に熊本洋学校から（直接
あるいは東京遊学から迂回して）入学した者24人、とくにそのうち中
途退校者を除いた20名ほどを熊本バンドとみる説がある。これは前者
のうち同志社入学者にしぼった説である。同志社に入らなかった人々は、
東京に学んだ少数以外、熊本かその近郷にとどまって学習をつづけた
[田中 1960: 84-85; 篠田 1965a: 4; 高道 1965: 234]。私は長い道づ
れに関心があるので、後説に与したい。

2. 熊本洋学校

設立の政治史的背景

幕末の熊本では藩士の子弟が各町内で党派を結んで互いに競争、というより軋轢をことし、藩校時習館でも時々大喧嘩が始まり、負傷者が出ることも稀ではなかったという [小崎 1938 : 8-9]。熊本藩内全体でも分党対立、派閥抗争が激しかった。もっとも勢力があったのは保守的な正統の朱子学派、学校党であって、筆頭家老の八代城代松井佐渡が率い、上士は多くこれに加わった。彼らは幕藩体制の現状維持を当然としたが、これに不満な少数党が主流派の左右に現れる。右派が尊王攘夷の勤王党、それから分派した敬神党は神道と国学を思想的拠所とする極端な国粋派であった。左派は実学党であって、学校党が虚文をもてあそび章句にならずで時勢に疎いことを批判し、日常の社会問題に切実な実学でなくてはならぬと主張して、実用と実践を重んずる開明派。その中心人物は世襲家老の長岡監物、世禄千石の奉行下津休也であったが、イデオログは二百石部屋住みの横井小楠 (1809-69)、そして支持基盤は下級藩士および豪農層と、身分序列を縦に貫く結集であった [小崎 1938 : 23 ; 徳永 1979 : 196-197 ; 大江 1985 : 101]。三党は互いに対立して抗争に鎗を削った。

実学党も 1855 年、「大学」の「在明明徳、在新民」についての見解の相違から、為政者の明徳を重視する藩士層の漸進的な明徳派と、領民の新民を先とする豪農層および少数藩士の急進的な新民派に分裂する。新民派の頭首は小楠 (妻は竹崎順子の妹)、主な領袖はその門下、郷土で佐敷惣庄屋の嗣子徳富一敬 (妻は順子の妹)、郷土で中山惣庄屋の嗣子矢島直方 (順子の兄) と、郷土で惣庄屋格の竹崎律次郎 (順子の夫) であった [徳富 1923 : 17, 68-69, 103, 132 ; 大江 1959 : 15-18 ; 徳永 1979 : 100]。

藩政は長く学校党の専断するところであったが、倒幕に於ける学校党藩政権の日和見主義と新政府への非協力について、新政府中枢と気脈を通じた実学党新民派が 1870 年藩政権を奪取し、学校党を藩政要路から一掃した。新民派の藩士たちは藩政府の高官となり、豪農の代表も藩政に加わって郡政の実権を掌握した。改革綱領の起草者が竹崎と徳富であったことは、豪農層が改革を主導したことを端的に示すものである

[大江 1959 : 58-60]。

改革綱領は、多面的な根本的改革のなかに、学校党の幹部養成校であった藩校時習館の解体と、洋学所の改造および医学校の設立を含んでいた。千石以上の嫡子を優遇する内規をもつ時習館は [篠田 1965b : 462-463]、藩士子弟を教育して藩の用に役立つ人材を育成することを目的としたのにたいし、洋学所改め洋学校は、士民の子弟を教育して国家有用の、その意味で藩の将来を担う人材を養成することを目的とした [大江 1959 : 83-85 ; 杉井 1965a : 73 ; 徳永 1978 : 198]。しかも、アメリカで学んだ横井小楠の甥の献策を容れて外人教師を採用することとし、藩知事 (旧藩主) の要請で軍人の経歴をもつ教師を求めることとなった [小崎 1938 : 10]。こうして実学党新民派の圧倒的な影響のもとに、南北戦争歴戦の退役砲兵大尉ジェーンズを給料月 400 円の 3 年契約で雇用し、旧藩上士の屋敷跡に洋風教師館を建造して、1871 年 9 月に設立されたのが熊本洋学校である [杉井 1965a : 79-82, 97, 99, 102-104]。

洋学校第 1 期生

洋学校は優秀な士民子弟を主に漢籍の学力試験によって選抜したが、時習館で成績抜群の者には無試験で入学を許した。また、藩 (県) 費によって運営される関係から熊本藩 (県) の士民子弟を対象としたけれど、他県の高官になった新民派元藩士が推薦するその県の俊才にも無試験入学を認めた [箕作・山崎 1951 : 4 ; 杉井 1965b : 348-349]。なお、旧洋学所の生徒および長崎留学の生徒、併せて 10 余名を編入させた [徳富 1923 : 323 ; 小崎 1938 : 12 ; 篠田 1965b : 461 ; 杉井 1965a : 159]。

こうして 400~500 人の志願者のなかから 45 人が選抜される。熊本および熊本周辺居住の下級士族の子弟が多かった [篠田 1965b : 458-461]。洋学修行の能力を考慮して、10 歳以上 15 歳以下という規定であったが、編入者があって実際には 17、8 歳の若者もいた [杉井 1965a : 74, 159]。編入者は長崎などで、すでに英学修行を始めていた。藩の将来を担うべきエリート養成校として、洋学校生徒は書籍文房具費から寮の食費まで支給されたのである [小崎 1938 : 12]。

3. ジェーンズの教育

単独で全科および生活指導担当

熊本藩側の洋学校担当者は、学則の制定をジェーンズに一任した〔杉井 1965a : 100〕。「学制」発布前で、学校設立者が依るべき規則も拘束される規則もない時代であった。ジェーンズは英国トマス・アーノルドのラクビースクールを範として人格形成に重きを置くとともに、自らが体験した米国ウェストポイントの陸軍士官学校に準じて禁酒禁煙・時間厳守・規律正しい生活を鉄則とした。全寮制の寄宿舎では生徒の監督を独りで担当し、教室では、句読師（通訳）などの教師を悉く解雇して、読本・英文法だけでなく、数学・地理・歴史・物理・化学・地質・天文等に至る全科目を単身担当し、テキストはみな英書、すべて英語の通訳なしで授業した〔佐波 1937 : 491-493 ; 小崎 1938 : 10-12 ; 渡瀬 1938 : 114-115 ; 杉井 1965a : 113-115, 135-136 ; 竹中 : 1965 : 262-263〕。洋学校の教育内容は、外人を教師とする中学校レベルの東京の学校で採用されていたものとはほぼ同質、同レベルであった、と推定されている〔杉井 1965a : 112, 149〕。第1期生 45 人中、洋学についていけないなどの理由で早々に 12 人脱落して、2年進級は 33 人となったが、ジェーンズは成績優秀な数名を後進生教授方に抜擢して下級生の指導に当たらせ、組数の増加に対応した〔杉井 1965a : 156〕。

洋学校第2期生および第3期生

洋学校の評判が高かったのであろう。定員 50 人のところ、1872 年入校の第2期生は県内外から集まり、73 人にふくれあがった。新民派私塾出身の豪農もしくは下級士族の子弟がその多くを占めたが、時習館が廃された後、洋学校が県下唯一のエリート校であったため、学校党士族の子弟も入学し、党争の芽が校内にもちこまれた〔杉井 1965a : 95, 159-160〕。

第2期生が入学した72年、「学制」が発布され、旧藩県設立の学校はその内容が区々であるため、私費で維持されるものを除き一旦すべて廃止となった。加えて、改革綱領が謳う「御役人一切公選」の急進性は中央政府の忌むところとなり、73年新任の県令によって実学党は県の政権から一掃されて〔杉井 1965a : 85, 94 ; 大江 1959 : 86-87〕、洋学校は

存廃の危機に陥る。豪農層の抛金と旧藩主の寄付によって辛くも危機を切り抜けたが〔篠田 1965b : 459-461〕、73年の入学者は前年の半数、36人に減じた〔杉井 1965a : 86-88, 91-93〕。

ジェーンズ、キリスト教を説く

ジェーンズは授業のなかでキリスト教を説くことは全くなかったが、生徒がやや英語を解するようになったと思われる73年末か74年初頭頃から、理科とくに天文学、そして歴史や英文学などの授業ではキリスト教や聖書のことを語り始め、やがて上級生有志を聖書の輪読会に誘った。一部の生徒は聖書を学ぶことは英語の上達に役立つとして、あるいは聖書の知識は欧米の文明と文学を理解するうえで必要であるとして参加し、儒教主義を標榜する者、あるいは学習の便をえる方便としての参加に抵抗を感じる者は反対し、生徒の間で議論が分かれたが、ジェーンズの熱心な指導に感激した生徒が学友を説得勧誘して参加者がふえていく〔佐波 1937 : 493-494 ; 小崎 1938 : 14-15〕。こうして校内の輪読会は聖書研究会に発展し、ついでジェーンズ宅に場を移すと祈祷会含みとなり、学外者も参入して応接間は人で溢れ、75年初頭頃には土曜日の祈祷会と日曜日の礼拝へと定期化した〔辻橋 1965 : 178-182〕。求道者たちは、儒教を捨ててキリスト教に転じたというよりは、儒教の「天」観念を足場としてキリスト教を理解し、キリスト教は儒教の精神を成就するものと信じたのである〔小崎 1938 : 27-28〕。

生徒たちはもっぱら英語をとおしてキリスト教の信仰に入った。クリスチャン、クリスチャニティ、プレイヤー、ゴッドなど、英語をそのまま用いた。そのため、邦訳が含蓄する旧来の観念や連想に囚われることなく、新しい信仰を理解した。理解できてから、未信者への説明のために訳語の選択に向かったのである〔徳永 1979 : 246〕。このように、英語をよく解する者の間で人目にたつことなく信仰が広がったため〔徳富 1923 : 224〕、求道者の出現にかかわらず、1875年9月ジェーンズの雇用契約が更新された。旧藩主の寄付で1年だけ任期が延伸されていたのである。

同年7月、第1期生11人が4年の課程を修めて卒業した〔徳富 1923 : 223〕。そのうち最優秀であった陸中水沢の士族山崎為徳（1859-81）〔小崎 1938 : 19-20 ; 佐波 1938 : 179-183〕や横井小楠の嗣子時雄

(1857-1927)らは熱心にジェーンズの集会に参加していたが、4年間生徒取締役長補助を勤めた小崎弘道(1856-1938)は、学友の勧誘にもかかわらず儒教主義の立場から参加反対のまま卒業し、熊本に新設された中学校の英語と数学の教師になった〔小崎 1938: 15-16, 19〕。英語修練のためにジェーンズの説教を聞きに行きはしたが、信仰には感染せずに卒業した人がいたことはいうまでもない〔徳永 1979: 219〕。

4. 花岡山の誓い

〔奉教趣意書〕

こうして、熱心な求道者が群をなす第2期生が最上級生になった。75年暮れから76年初頭の冬期休暇10日間、求道の生徒たちはジェーンズの勧めで連日連夜の祈祷会・聖書研究会をもったところ、熱誠と興奮の渦が激しく高揚して、新入の下級生を巻き込みりバイバル状況を呈し、新学期に入っても学校の授業聴講どころではなかった。1月末に至って、熊本郊外の花岡山に続々40人登山し、「奉教趣意書」を朗読したうえで35人(第1期生3人、第2期生9人、第3期生1人、第4、5期生22人)が署名した〔徳富 1923: 234-236; 佐波 1937: 494-495; 渡瀬 1938: 110-113; 田中 1960: 95-98; 杉井 1965a: 162-163〕。誓約の第1条に、「凡そ此道に入る者は、互いに兄弟の好を結び、百事相戒め相規し、悪を去り善に移り、以て実行を奏すべし」とある。圧倒的な儒学派の攻撃に団結して対抗するための結盟でもあって、成員を確認する一団の「道づれ」の結成である。第1条末尾の「実行」とは、前文によれば「西教の公明正大なるを解明」して「此の教えを皇国に布く」ことであった。署名こそしなかったものの、同志であった阿蘇出身の第2期生赤峰瀬一郎が、「熊本の西なる岡を敷嶋のバンカー・ヒルとわれは唱へん」と詠んだなりに、誓約は単なる「兄弟分」の約束ではなく、その志において、米国独立戦争が火蓋を切ったバンカー・ヒルの銃声にもなぞらえる歴史的意義をもつとの、信者仲間の意気込みが窺われる〔徳富 1923: 237〕。

校内儒教派の攻撃

洋学校ではキリスト教反対の生徒が多数を占めていた。彼らはりバイバルで求道者が多数出たことを知り、これにたいし結束して対抗するべ

く準備していたが、花岡山誓約のまさにその日、時こそ来たれと少なくとも 36 人が熊本東郊の水前寺公園に集まって排斥の氣勢を挙げた。当時、反対派＝儒教派は正義派、結盟派は西教派と呼ばれた [佐波 1937 : 520 ; 田中 1960 : 96 ; 辻橋 1965 : 183-184]。熊本は概して保守的な土地柄で、中でも国粹色を強めて洋学校に敵意を露わにしていた敬神党は、洋学校の西教派を襲撃するのではないかと噂された [高橋 1965 : 308]。そして、実学党新民派の若い世代が多数キリスト教の信仰を表明したとき、竹崎律次郎らかつて急進的であった古い世代の新民派幹部たちが、ことの意外に極度に狼狽した [佐波 1937 : 521 ; 大江 1959 : 89]。

父母親族の反対

加盟した生徒たちは、父母のもとに呼びもどされて盟約からの脱退を要求され、従わなければ退学させると威嚇される。そうした迫害を免れた者はきわめて少数であった [田中 1960 : 96 ; 辻橋 1965 : 199]。上級生に追従して加盟した最年少者は数名脱会したが、多数は頑として聞かず、父母親類の驚愕を背に帰校した [渡瀬 1938 : 112 ; 辻橋 1965 : 199]。第 1 期生の横井時雄や、第 2 期生の金森通倫 (1857-1945)・宮川経輝 (1857-1936)・市原盛宏 (1858-1915) らは家庭で厳しく棄教を迫られ、リバイバルの先達であった横井と金森が蒙った拒否は、とりわけ激しかったと伝えられている。横井は母から棄教せずんば自害すると迫られ、金森は屋敷牢に禁固されて外部との接触を一切絶たれたが、同志の必死の激励もあって、志を枉げることなく苦境から脱出した [佐波 1937 : 495-497 ; 小崎 1938 : 16-18 ; 渡瀬 1938 : 107, 112-116 ; 高橋 1965 : 308]。

校内両派の討論

正義派は、異教は学校設立の趣旨に反するとして、廃校を避けるために信徒に退校を要求してきたので、学校の大広間で対論することとなった。帰校してきた西教派 30 人ほどが列をなして一方に坐り、正義派は他方に座を占めた。西教派の首席に就いた海老名弾正 (1856-1937) は正義派の要求に反論して、我々は学生として学校の面目を辱めたところは何もない。キリスト教の主張は真理と認めるゆえに信ずるのであり、

信仰は各自の自由である、と断言した。事実、西教派の生徒たちは洋学校の精華であった。どの科目でも西教派が上位を占め、後進生教授方に指名されていたのである [徳永 1979 : 246]。議論に負けた反対派は、耶蘇教徒は不孝者、耶蘇教は不忠不孝の邪道と捨て台詞を吐いて去り、校内は沈静を取り戻した [渡瀬 1938 : 116-117]。

ジェーンズの感化—職業選択

すでに述べたように、洋学校では学科の授業も学寮の監督もみなジェーンズが独りで担当し、生徒はその指導を納得して受容したので、彼の感化の大きさ深さには計りしれないものがあつた。それは少なくとも二項について確認することができる。全体としては少数派に止まったものの、すでに述べたようにかなりの数の、しかも成績優秀な生徒が信仰を起こしたのが、その一つである。もう一つは職業選択にかかわるものであつた。

始め生徒は県の実学党高官の政談に青雲の志を喚起され、また彼ら高官はエリート候補の若者たちに郷土の将来を託する思いであつたから、洋学校設立の趣旨からして、生徒たちは参議となつて廟堂に立つ明日を夢見た。しかし、この傾向を不健全とみなしたジェーンズは、国家隆盛のために国力を増進するうえで政治は末葉であつて、まず殖産興業こそ肝要である、と説いた。この訓諭は頗る効果を奏して忽ち方向を転ずる者多く、彼らは農学、鉱山学、機械工学、造船学などと、新しい方針のもとに勉学を進めた。ところが、ジェーンズはキリスト教を説くに至つて、殖産興業は国力増進のために根本的なことであるが、一層優れて必要なのは人間を作ることである。人を作る道に宗教と教育の二つがある。殖産興業に従事する者は国家を裨益するとともに自己にも利があるのであるのにたいし、宗教と教育に当たる者は犠牲と献身によりよくその業をなしうるのであつて、物質的には最も困難な生活を忍ばなければならぬ。けれども、国家に一身を捧げる志のある者の取るべき道はこれである、と諭した。信仰に燃える若い心は忽ち殖産興業を去つて、宗教と教育に志を転じた [佐波 1937 : 498-499 ; 小崎 1938 : 20-22 ; 杉井 1965a : 125 ; 高橋 1965 : 306-307]。

正義派の攻撃が収まった後、西教派のなかでも信仰熱心な横井・金森・海老名らは、直ちに伝道に向かおうとした。組織的な神学教育を受

けていないジェーンズは、自らの指導の不備を思ったのであろう、まず勉強して準備せよと忠告し、求道者たちの希望を容れて、彼ら35人に76年7月洗礼を授けた〔高橋 1957：27〕。卒業後の進路については、同じく南北戦争歴戦の元陸軍中佐で米国伝道会社宣教師のデビス (Davis, J.D., 1838-1910) に問い合わせ、彼が関与して前年開設されたばかりの官許同志社英学校 (以下同志社と略称) が教派色の薄いことを確認して、愛弟子たちを悉くここに託してはどうかと考えた〔佐波 1937：498；小崎 1938：18-19；渡瀬 1938：117-120；辻橋 1965：204-205〕。

5. 同志社の熊本バンド

大挙同志社へ

延ばされていたジェーンズの任期が1876年10月で切れるのと、洋学校の支持基盤であった豪農層が西教派子弟の輩出をみて熱意を失い、洋学校自体の存続も危ぶまれたので、同年7月第2期生11人の卒業とともに、洋学校は廃校となった。第3期生12人もこのさい変則ながら卒業扱いとなったが、徳富猪一郎 (1863-1957) ら第4、5期生は退校を余儀なくされた〔徳富 1923：223；杉井 1965a：96-97〕。「奉教趣意書」の結盟を守りぬいた人々およびその同調者合わせて20人ばかり、ジェーンズの斡旋で大挙して同志社に向かい、同年9月、そのうち洋学校卒業の第1期生と第2期生は余科 (神学科) に、卒業に至っていない人たちは普通学科に編入された〔小崎 1938：30〕。学友の友情とジェーンズの指導によって遅れて入信した儒教派の第1期生小崎 (熊本中学校教師)、バンカー・ヒルの歌を詠んだ第2期生赤峰瀬一郎ら、結盟外の人々もここに含まれる。さらに翌77年9月、東京の開成学校で学ぶ山崎と横井、それに青山学院で学んでいた和田正脩の第1期生3人が、同志社に転校してこの一団に加わった〔箕作・山崎 1951：7〕。

キリスト教主義学校の嚆矢であった同志社は、創立間もないためにはだ不完全で、学則など諸規則は何一つ整っておらず、さながら昔の漢学塾のような状態であった。そのうえ学生は年齢学力ともにまちまちで、満足できる授業は少なかった。1872年公布の「学制二編追加」に「外国教師ニテ教授スル高尚ナル学校 (略) 之ヲ汎称シテ専門学校ト云フ」とあり、同志社の神学科は専門学校に該当すると思われるが、「神教

修身等ノ学科」を除くと明記され、かつ「西教伝教士」は外国教師と認めないことを同年の文部省第 29 号が含意している。同志社は官許と云っても学制関係の規則の埒外に放置され、近代的な学校の体裁を整えるための外的な条件を欠いていたのである。

ジェーンズの訓告

熊本からの学生たちは同志社の現状に大いに不満で、去るか止まるか大阪外国語学校に赴任したジェーンズに書面をもって相談したところ、彼はすぐに上洛し、喜び迎えてデビス宅に集った教え子たちに告げた。もし同志社に諸君の希望に反するところがあるならば、なおさらのこと、ここに止まってこの学校を諸君が望むようなものにしてはどうか。貴君らにはその力がある。この学校のために働いている宣教師は、米国の最も誠実な信者の祈りを背後に負っていることを忘れないでほしい。信者の熱心を無にすることなく、進んで同心協力、これらの教師を助け、同志社を貴君らの希望を満たすに足る学校たらしめよ、と。学生たちは感動のうちに傾聴し、落ち着きを取り戻した〔小崎 1938：28-29；渡瀬 1938：128；高道 1965：240〕。

学生たちと教授たちとの協議も成立した。同志社に神学と普通学の二科を設け、神学科の課程は宣教師たち教授、普通学科の課程は熊本の学生が助教として担当することとなる。後者の科目は熊本洋学校の学則を標準として学生が策定し、校長新島襄（1843-90）の無訂正承認をえて普通学科課程と定められた。先にふれた神学科・普通学科は熊本の学生入学の後、このようにして設置されたものである。また、塾則は学生の倫理綱領ともいべきものであるが〔高道 1965：242〕、学生会を開き、多数決をもって議決したうえで、校長による一、二の訂正をへて制定された。このように専ら学生からの発議によって学則ならびに塾則が成立し、同志社はここに始めて学校の体裁をなしたのである〔渡瀬 1938：134〕。

学生の風紀を正す

1878年6月制定の同志社規則のなかに、

一、生徒在校中飲酒登楼喧嘩等ハ勿論淫楽ガマシキ場所（芝居、浄瑠璃、義太夫、揚弓場等）ニ立チ入ルヲ許サズ。

一、受業時刻至ル時ハ速ニ教場ニ入ルヲ要ス。若シ故ナクシテ遅刻数

回ニ及ブ時ハ止ム事ヲ得ズ退校セシムベシ。

一、夜九時半ヲ以テ門限ト定メ、十時ヲ以テ入寝時ト定ム。

の条項がある [高道 1965 : 240-241]。第 1 条にふれる行為に心を奪われた学生は、第 3 条の帰寮が遅れがちとなり、また第 2 条の授業を度々遅刻することにもなりかねない。したがって、この 3 カ条はおおむね一体のものであり、一体とすれば第 1 条がその中軸であったと推量することができる。かく言う根拠の一つは、折角入った開成学校に愛想をつかして同志社に転校した、洋学校第一期生山崎の転校事情を物語る書簡 (1877 年 9 月付) である。

東京大学には (中略)、誠に日本第一の学校にして、人々は日本第一とすれども、其の内容を思はば、事が齊はず。生徒の学業は甚だ高きに非ず。而して生徒の品行は甚だ悪し。其の根本を求むるに、此の学校にては、智を本とし徳を末にし、智を尊め徳を賤しめばなり。何ぞ此の大学校のみならんや。日本他の学校にも此の風あり。(下略) [高道 1965 : 245-246]

先に紹介した箇条は、熊本出身者が中心になって作った塾則の核心部分と推量される。ジェーンズが米士官学校の舎則を範として熊本洋学校で採用した条項をもとに、熊本出身者が一般学生の「品行甚だ悪き」実情に照らして作成したものではないだろうか。

年長の学生のように飲酒登楼にさほど関心のない年少者は、菓子屋が校門の前に常に店を張り、買い食いがけじめなく盛んに行なわれていることを問題とした。そして、間食は寮の食堂でのみできるものと定め、下級生の代表が指導者となって買い食いを取締り、従わぬ者には制裁を加えた [小崎 1938 : 29]。熊本出身の学生は、神学科の学生だけでなく、年少の普通学科の学生も能力相応に校風改善に貢献したのである。(1877 年末男子生徒総数は 105 人 [新島 1984 : 520])

英語による神学教育

同志社では神学科の授業は始めみな日本語を用いる定めであって、宣教師たちも未熟な日本語で教えた。中国やインドなどの伝道地ではその国の言語で伝道士を養成したので、日本でも同じ方針のもとに英語でなく日本語で教授したのである [高道 1965 : 239 ; 高橋 1965 : 313]。しかし、4 年間英語のみの教育を受け、英語の授業が理解できる熊本の学

生たちは大いに不満であった。それに、日本語のできない教授が使う通訳は、しばしば語学の素養が乏しく原語の意味を正しく伝えることができないうえに、邦語も拙劣疎漏な言葉を使用したことが、漢籍の基礎教養を備えた熊本の学生には耐え難かった。こうして、日本人教師は日本語、米人教師は英語でとの要望が、若干の曲折をへて採用された。しかし、英語の授業についていけない学生もあり、その人たちはしだいに退校したので、1879年、神学科最初の卒業生15人は熊本洋学校出身者のみとなった〔小崎 1938：30-31〕。

規則への反撥

中退は英語授業からの落伍ゆえばかりではなかった。卒業を待たずに退校した人のうち少なくとも同志社第1期生の非熊本3人について、熊本出身者の「横暴」に嫌気がさしたためと伝えられている〔田中 1960：91-92；高橋 1965：307〕。熊本人が中心になって作った校則・塾則、とくに前記3カ条に至っては過度の束縛あるいは厳格すぎる規則と捉えられ、同志社を正常な学校にするための熊本出身者たちの努力が「横暴」とみなされた。熊本の若者より1年先に入学した第1期生、そして武士的な質実剛健、ピューリタンの生活規律が肌に合わぬ京風好みの学生たちが、熊本出身学生に反撥したとしても不思議ではない〔田中 1960：93-94〕。しかし、熊本の学生たちは、今日でいえば教養科目に相当する課程を洋学校で修めていて、一般の学生より概して優れていたためか、反撥は表面化するよりは内攻し、多くは黙々これに服従するかまたは退校した。かくて校風はまったく一変したという〔小崎 1938：29〕。熊本出身者は服装など一切無頓着、質朴というよりはむしろ粗暴であったとの証言もある〔篠田 1965：3〕。素地に若いエリート田舎士族の顔が透けて見えるようである。

奉教記念会

彼らは入学以来毎年1月に花岡山記念会と称する集会を行うのを恒例とした。78年の記念会にさいし、同志社には花岡山結盟に参加しなかった洋学校出身の信徒がいるのだから、奉教記念会と改称してはという横井の提案が採択され、以後この名称のもとに同志社・熊本洋学校同窓会が開催された。第5回記念会の席上、洋学校1期生の山崎が発表した五

言 74 行に及ぶ長詞は、末尾で「男児生あれば必ず死あり、死は須く真理の為にすべし。富貴と利達は、変ること恰も浮雲の如し。真理独り変わらず、長へに天地と共に存す。真理は上帝の意にして、真理は上帝の力なり。古人大業を立つる、只真理を行うに在り」と、ジェーンズに培われた熊本バンドの心意気を歌い上げた「信仰正気歌」といえよう〔佐波 1937：526-527；箕作・山崎 1951：18；辻橋 1965：205-206〕。熊本洋学校出身の同志社学生は、バンドと呼ばれるに恥じない行動特性のみならず、志に結ばれる団結を示したのである。

彼らが同志社に入学した 1876 年末、京都に初のプロテスタント教会が 3 カ所設立された。教会史担当宣教師ラーネッド (Learned, D.W., 1848-1943) 宅の京都第一公会、新島校長宅の京都第二公会、旧約聖書担当宣教師ドーン (Doane, E.T., 1830-90) 宅の京都第三公会がそれぞれである。いずれにも熊本バンドの神学科 1 年生 1、2 名が仮牧師、長老あるいは執事となってこれを助けた。翌 77 年の夏期休暇には手分けして福岡、高知、今治、岡山、岸和田、大阪、彦根、伊勢、安中等に伝道し、各自数名の有望な同志社入学志望の少年を連れて学舎に帰ってきた。さらに翌 78 年の夏、京都第一公会から笠岡・今治・美濃・安中、第二公会から日向地方・岡山・高槻・福知山、第三公会から亀岡・彦根と分担して伝道し、各地で教会設立の基礎を築いた。この頃地方では政談演説が流行し始めていたが、弁士は立派な大人で素行に問題があった。しかるに同志社から派出された雄弁家はみな 20 歳前後の青年であり、酒は飲まず煙草も吸わず、それに品行方正であったことが、地方の若者および彼らの父母を驚嘆させ、同志社の名声は俄に響き渡ったという〔小崎 1938：32-35；渡瀬 1938：141-145；高道 1965：243-245〕。

同志社卒業

このように、学期開講中の神学の学習と牧会実務の研修、休暇を利用しての開拓伝道の実習とで鍛えられ、いよいよ 79 年 6 月最初の卒業生が出た。

同年 4 月札幌バンドの 1 人に宛てた書信で新島は、「来る 6 月卒業する生徒は、悉く信徒にて皆何れの任地にあるも基督に従い人の益をも計る輩なりと確信す」〔大島 1991：176〕と期待している。15 人の卒業生はことごとく熊本バンドの若者、洋学校第 1 期生 4 人、第 2 期生 11 人

であった。卒業後の進路は牧師6人、教師8人、実業1人。牧師より人数が多い教師の大部分は同志社かその系列の学校の教師であって、熊本バンドの面々は恩師ジェーンズの訓戒を守ったと言えるだろう。

英才を謳われ将来を期待されながら早世した山崎を除いて、中年で官界・政界・実業界へ転じた者も半数近くあり、それぞれその分野で名をなした。生涯キリスト教界にとどまった小崎・海老名・宮川らは教界リーダーとして名をはせた〔渡瀬 1938：491；高橋 1957：52〕。新島の衣鉢をついで同志社総長（社長）になった者4人、同志社教授・関係学校長7人と〔田中 1965：402〕、同志社第1回卒業生は同志社教育の精華として母校の名を高からしめたが、それはとりもなおさず、彼らを送り出して1876年に廃止された熊本洋学校の名を、長く歴史に刻むものでもあった。

6. コンボイとしての熊本バンド

コンボイ形成の年齢と環境

同志社第1回卒業生15人の生年を調べると、ほぼ8割が1856～1858年生まれ、その年齢差は2歳以内であった。全体で生年に3歳ほどの幅があるのは、洋学修行を考慮して、熊本洋学校の入学年齢が11歳から15歳以下と幅広く、単年でなかったためである。該当1人だけの出生年次を除いて入学卒業の年齢をみれば、洋学校第1期生の入学は14歳、卒業は18歳、第2期生の入学は15～16歳、卒業は19～20歳で、ともにほぼ15歳ころまでに入学し、10歳代後半洋学校で4年間訓練を受けたことになる。彼らの同志社入学は同年であるので一纏めにして言えば、入学は18～20歳、卒業は21～23歳となる。20歳前後3年間、同志社で専門教育を受けたのである。

洋学校と同志社を繋げるなら、熊本バンドを代表するこれらの人たちは、15歳前後から20歳過ぎまでの7年間、現代の高校生から大学生に相当する思春期の真盛りに、同世代の志のある有能な若者たちと、同じ屋根の下で同じ釜の飯を食い、ともに英語に悩まされ宣教師たちの保守的の神学と戦いながら、学習を重ねた。しかも、外にたいしては熊本の保守的の風土、京都の排耶的の風土と学生界の風儀の乱れに抗し、内、「奉教趣意書」にいう「百事相戒め相規し」つまり切磋琢磨しつつ、スクラムを組んで、コンボイをなして歩んだのである。

バンドの焦点

この論文の導入で述べたように、バンドは成員それぞれを中心とするネットワークの集合であるが、バンドより一段高いところに成員のすべてが繋がる焦点があった。ジェーンズその人である。元来、彼に導かれ彼によって感奮させられて成立したネットワーク集合＝バンドであった。彼は弟子たちが同志社に落ち着くまで焦点でありつづけ、アメリカに帰国した後は、奉教記念会、したがって花岡山で奉教を誓った志がこれに代わったのかもしれない。

ジェーンズが宣教師でなかったこともあって、熊本洋学校で説くところは必ずしも伝統的な教義にとらわれない、リベラルな納得のいくものであったようだという [辻橋 1965 : 174, 197 ; 高橋 1965 : 310]。1880年代の後半日本に将来された「新神学」に理解を示した教役者に、熊本バンド系の人士が比較的多かったことは、ジェーンズの初期的感化に負うところがあったのかもしれない。バンドの有志たちは彼らの焦点たりし恩人のことを忘れることなく、ジェーンズが晩年不遇な生活に陥ったと聞いて支援の手を差し伸べている。

成員の相互啓発・支援

バンドの成員は互いに助けあい、啓発しあった。小崎が70歳になって述懐したつぎの言葉は、這般の消息をよく物語っている。小崎を誘導しようとした学友側の代表海老名弾正の証言をこれと付き合わせると、コンボイ内部での切磋琢磨の実況がさらに活き活きと浮かび上がる。

○ジェーンズが一箇年程（聖書の）講義を継続する間には只感服する丈でなく、進んで基督教を信ずる者が多く起きたが、中にも海老名、横井、金森、宮川、森田（久万人、1858-99, 1期）、山崎、市原等の諸君は最も熱心家で、忠実に教を研究するのみでなく又他に向って熱心に伝道を勉め、学業の余暇を割いて求道者の為に聖書を講じ訪問を為す等布教に努力した。私も彼等より屢々誘導されたが、初めのうちは反対して議論を戦はせても私が勝って居たけれど、後には負ける様になった。其訳は彼等は聖書に通ずる上に、ジェーンズより基督教の弁証論や歴史論等私の知らない多くの知識と事実を授けられて居たのである。且彼等が至誠神に事へ、人の為友人の為に道を伝へんとする熱愛温情は殊に人を動かさずには止まなかった。頑固に反対して居た

私が終に其勧めに従ひジェーンズの集會に出席するに至ったのは此故である。[小崎 1938：24-25]

○小崎弘道氏は、比較的に儒教の素養も多く我々の仲間になっては自ら先達を以て任じ、我々も亦之を許して居った。故に小崎氏を差措いてクリスチャンになったことは、浅からぬ失望であった。数年君等を友として、将来も永く君等と共に国事に殉ぜんと志望して來ったことが水泡に帰したことは、苦痛に堪へないと私の前に涕泣したことがある。私の如きは殊に小崎氏の指導を受けて來たのであるが、宗教問題と云ふと私にも定見が出來、小崎氏と論談して毫も遜色なきのみならず、寧ろ勝目が七分あった。此方が彼方を説破して、指導せねばならぬ態度を取り始めた。而して、金森氏は既に我々の陣門に下った。親友中残る者は独り、小崎氏のみといふ次第となつた。一日金森は我々の所に来て、唯今小崎を散々ヤツケたといふ。此の(1875年)秋は光景一變小崎は四面楚歌の声といふ有様。而して校内はリバイバルといふ騒ぎ。(中略)ジェーンズ先生宅の祈祷會は氣焰天をも突く勢となつた。小崎氏は憤慨より憤慨に入り、(中略)我々を圧倒せんと苦悶したのであるが、終に頭腦を痛め入院するに至つた。私は之を聞き氣の毒に堪へず、病院に見舞つた。何ぞ知らん、忽ち宗教問題の議論となり、患者をしてより強く頭腦を痛ましめ、早々にして帰校した。斯くして神靈に満ちつつ明治九年の一月を迎えた。[渡瀬 1938：105]

また、成員間の支援は随所に記録されている。海老名の伝える洋学校時代の既報の集會的支援一件と同志社時代の個別的支援一件を紹介しておく。

○花岡山結盟の結果たる横井金森兩氏への迫害に際しては、必死の熱誠を以て盟友の激励に努めた [海老名 1937：85]。

○貧乏して榮養不良であつた上に、勉強が過ぎた。その為になんか衰弱になつて、それから眼病に罹つた。知識欲は燃ゆるばかりであるが、書物を読む事が出來ない。医者は一切眼を使つてはならないと云ふ。非常に困つた。今に感謝して忘れないのは、早稲田(大学)の浮田君(和民、1860-1946, 2期)である。浮田君は調べ物を読んで聞かして呉れた。[海老名 1937：65, 86]

コンボイと闘争

友人関係にみるコンボイは、経験と志向を共有する同世代人の比較的小規模な心情結集体である。それは親密な関与者集団であるが、外部にたいしてしばしば閉鎖的さらに闘争的でさえあった。保守的な熊本では、奉教結盟の後、加盟の若者が受けた圧迫との闘争、すなわち世評に晒される実学党の父母親族からの厳しい拒否への抵抗、また洋学校内の儒学派＝正義派の攻撃にたいする対抗、がそれである。「奉教趣意書」は偏見に基づく攻撃に対抗して信仰を固く守り抜くための連帯表明であったが〔辻橋 1965：195, 197〕、そのことが未発の圧迫者たちを刺激して猛烈な攻撃を招いたのである。

同志社に入学してからは、キリスト教に反感をもつ京都市民の視線に堪え、真宗本願寺派らの執拗な耶蘇教排撃〔高道 1965：248-249〕と戦わざるをえなかったが、それよりも切実であったのは、享樂的で不品行な学生や規律違反の学生との学内闘争であった。ここには熊本での西教派と儒学派・国粹派の闘争では括りきれない、克己派と享樂派の闘争が擦り合わされた形になっている。

同志社の熊本バンドは20数人を擁したが、内部がいくつかの仲良しグループに分かれていたわけではないようである。それは一つには、バンド形成の初期にジェーンズという強力な結集の焦点があったことと、二つには、学校内外の風潮風儀に抗し、しばしばその殲滅的圧力と闘い、自らのあるべき在り方を構築し維持しなければならなかったためではないだろうか。

特攻隊のように組織の上位者の命令によって形成されたコンボイの場合、対外的対内的な競争はあっても闘争は問題にならない。また、プレーズのように、コンボイをエゴ依存的な独自の一团とみれば、闘争はほとんど問題にならないだろう。これにたいして友情と大志の共有によって結ばれた一種のエゴ集合の場合、志す価値の実現のために、当事者たちの本意でなくとも、外部にたいして闘争の場面が生起したのであろう。

コンボイの変容

先にふれた卒業後の進路は、バンドの若者たちの経歴の分岐、したがってバンドの個別のあるいは小集団的分解、細分化を予測させる。山崎を中心として作られた「同級回文」が友情を保ち精進を励ましあう媒

体となったが、山崎の夭折とともにこの同人誌も短命で終わり、絆となるものはなくなったようである〔箕作・山崎 1951：9〕。彼らのうち、牧師職を選ばなかった人たちもおおむね信徒としてキリスト教界に止まった。牧師職を貫いた人びとが牧する個別教会は、やがて日本組合基督教会なる教派に結集する。1895年10月、教派の信仰告白として発表された「奈良大会宣言書」は、形式内容ともに「奉教趣意書」を踏襲した跡が顕著に認められるという〔辻橋 1965：207；高橋 1965：315-317〕。熊本バンドの中核部分はコンボイとして永く存続したのである。卒業後の互助協力、とくに牧師間の互助協力については、いくつもの事例が伝えられているが、記録に止められたのは事実のごく一部にすぎないのであろう。

時間の厚みのなかでコンボイをとらえる場合、その変容は必然的である。成員の転職、職場・住所の移転、家族条件の変化、健康状態さらに加齢などによって、コンボイは分裂、縮小、弱体化を余儀なくされ、やがて分解・消滅に至ることであろう。

卒業後のコンボイの持続と変容の態様は一般に面接調査によって明らかになるはずであるが、バンドの形成が1870年代後半に遡る熊本バンドのように古いものについてはこれは叶わず、今となっては関係資料の精査を企てるほかに道がない。日本組合基督教会の母体となって、一定の歴史的意義を担った熊本バンドについては、個別教会における文書資料の博搜により、分解過程のさらなる追跡が期待されよう。

3. 「人生の道づれ」研究における資料の問題

熊本バンドについて「人生の道づれ」を考察し、ブラスがライフコース研究に取り入れたコンボイ概念の彫琢を志した。成し遂げたところは、彫琢というより肉付けにすぎないが、あわせて課題をあぶり出すことになった。

コンボイの概念に導かれた今回の研究は、エゴ集合として括られる人たちが、何について協働したかを詳しく掘り起こすが、そのさいエゴ間にどのような相互行為がどのような心情で為されたかは、小崎の入信に至る場面での、小崎と海老名たちとの相互行為についてしか明らかにできなかった。関与者たちがどのように協働したかといういわば道具的

instrumental 総体的な情報と併せて、そのとき関与者たちが相互にどんな行為をどんな心情でしたかという表出的 expressive 個別的な情報が、当該人物の成長に及ぼしたコンボイの意義を理解するために大切なのではなからうか。

小崎と海老名たちとの相互行為とその心情は、彼らの自伝によって明らかになった。私がつぎに調査した札幌バンドの人たちについては、何人かの自伝が残されているので、甲・乙・丙つき合わせることで、相互行為とその心情をかなり明らかにすることができた。これらのことから、一定の研究視点の成果は、使用しえた文献資料の種類と量に依存し制約されるという自明のことを確認する思いであった。また、私の既往のコンボイ研究は悉く既刊の文献資料に依拠しており、未刊の生の文書資料を用いていない。自筆資料から、刊行された同じ資料では掴めない無言の情報をくみ取りうることも、戦没者の遺書の調査で経験したところである。面接調査不可能な対象についての、既刊資料だけによる研究は大きな制約を抱えることを、痛感させられた。

私はそう考えて札幌バンドにかんする論文の執筆を途中で擱き、コンボイ当事者の生の資料の搜索を開始した。当然のこととして、対象となるコンボイを入れ替えなければならない。私はコンボイ研究に先だっていくつかの異種のコンボイを手探りしていたので、そのなかから明治20年代末に真宗大谷派で起きた白川党事件の当事者を選び、彼らの遺文、手記・日記・書簡の類を搜索することとした。こうして、実に偶然、彼らのうち一人、井上豊忠の遺文をその子孫から大量に入手する僥倖に恵まれた。

私が入手しえた自筆日記は30余年の長期にわたり、しかも出来事だけでなく人々の相互行為や感情交流まで記録した詳細なものである。かくて私の研究は、ライフコースにおけるコンボイの研究から、集合ライフヒストリーズというキーワードで表示すべきライフヒストリー研究の新しい地平に出た。今は、札幌バンドに即したコンボイ研究を深めるよりも、白川党について集合ライフヒストリーズという研究枠組の生産性を例示することに力を注がなければならない。集合ライフヒストリーズとはコンボイのライフヒストリーに外ならない。本稿は熊本バンドについてコンボイを考察し、集合ライフヒストリーズ研究への道を整える役目を担うものである。

参考文献（著者氏名のABC順）

- 海老名弾正、1937『我が信教の由来と経過』海老名一雄、私家版。
- 井上 俊・杉野目康子訳、1985『日本人の生き方—現代における成熟のドラマ—』岩波書店。
- 小崎弘道、1938『自叙伝』小崎全集刊行会。
- 久山 康編、1956『近代日本とキリスト教』（明治篇）、基督教学徒兄弟団。
- 箕作・山崎記念小公園建設発起委員会編・発行、1951(?)『箕作省吾と山崎為徳』。
- 新島襄全集編集委員会編、1984『新島襄全集』5（日記・紀行編）、同朋舎出版。
- 大江志乃夫、1959『明治国家の成立—天皇制成立史研究』ミネルヴァ書房。
- 大江志乃夫、1985『熊本県における藩政改革』藤野保編『九州と藩政改革（Ⅱ）』国書刊行会、77-118。
- 大島正健、1991『クラーク先生とその弟子たち』（補訂版）新地書房。
- Plath, D.W., 1980, *Long Engagements: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press.
- 佐波 亘編、1937『植村正久と其の時代』第一巻、教文館。
- 佐波 亘編、1938『植村正久と其の時代』第五巻、教文館。
- 篠田一人監修、1965『熊本バンド研究』みすず書房。
- 篠田一人、1965a「日本近代思想史における熊本バンドの意義」篠田一人監修、1-32。
- 篠田一人、1965b「熊本県立図書館所蔵文書」篠田一人監修、458-461。
- 杉井六郎、1965a「熊本洋学校—実学党の理想教育機関」篠田一人監修、66-164。
- 杉井六郎、1965b「山崎為徳」篠田一人監修、346-361。
- 高橋昌郎、2003『明治のキリスト教』吉川弘文館。
- 高橋 虔、1957『宮川経輝』比叡書房。
- 高橋 虔、1965「宮川経輝と金森通倫」篠田一人監修、306-330。
- 高道 基、1965「熊本バンドと初期同志社」篠田一人監修、234-258。
- 竹田 旦、1989『兄弟分の民俗』人文書院。
- 竹中正夫、1965「小崎弘道における国家思想の展開」篠田一人監修、259-278。
- 竹内利美、1960「若者組」日本民族学協会編『日本社会民俗辞典』第4巻、1616-1630。
- 田中良一、1960「熊本バンドと同志社」住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』みすず書房、83-98。
- 田中良一、1965「蔵原維郭と市原盛宏」篠田一人監修、381-413。
- 徳永新太郎、1979『横井小楠とその弟子たち』評論社。
- 徳富健次郎、1923『竹崎順子』福永書店。
- 辻橋三郎、1965「『奉教趣意書』の成立とその後—熊本バンドの精神—」篠田一人監修、165-233。
- 渡瀬常吉、1938『海老名弾正先生』竜吟社。